広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第53号　2004　291－296

他者参照過程に感情価処理は介在しているのか？

中尾　敬・宮谷　真人

(2004年9月30日受理)

Does other-referent process invoke evaluation process?

Takashi Nakao and Makoto Miyatani

This study examined whether friend-referential process invokes evaluation process or not by using task-facilitation paradigm (Klein, Loftus, & Burton, 1989). Fourteen participants performed a series of initial and target tasks, which were either friend-referential ("Does this word describe the friend?"), evaluative ("Is the word socially desirable?"), or semantic ("Is it difficult to define the word?"). A combination of three initial and three target tasks made nine conditions. Comparisons among these condition showed that reaction times for target tasks were shorten when initial and target tasks were the same than when they were different. But the time required for the evaluation target task was the same regardless of whether it was preceded by the friend-referent or by the semantic task. Considering with the results of Nakao and Miyatani (2004) which showed that self-referential task did, but acquaintance-referential task did not facilitate the subsequent evaluation process, these results revealed that evaluation process is not evoked by the other-referential process, although referent person is a familiar friend.

Key words : self-reference, other-reference, evaluation, task-facilitation paradigm
キーワード：自己参照，他者参照，評価，課題促進パラダイム

われわれ人間は，外界の事物に関する概念を形成するだけでなく，自分自身についての概念も形成している。この自己概念の処理過程については，主に自己参照効果（self-reference effect; SRE）の研究において調べられてきた。

自己参照効果とは，記銘材料を自己に関連させて処理すると，意味的処理や他者に関連させて処理した場合よりも記憶が促進される，という記憶現象である（自己参照効果に関するレビューとして，遠藤，1988；堀内，1995；池上，1984；稲葉・林，1993；加藤・丸野，1986；Symons & Johnson, 1997があげられる）。Rogers, Kuiper, & Kirker（1977）は，Craikら（Craik & Lockhart, 1972; Craik & Tulving, 1975）によって用いられた処理水準説を検証するためのパラダイムに基づき実験を行った。彼らは刺激として人格をあらわす特性語を用意し，個々の特性語について以下の課題を被験者に課した。特性語の形態について判断する形態課題，音韻について判断する音韻課題，意味について判断する意味課題，自分に当てはまるか否かを判断する自己参照課題，の４課題である。その後，これら４課題条件における偶発記憶の成績を比較した。その結果，自己参照条件は，形態条件，音韻条件，意味条件，のどれよりも再生成績が高かった。さらに，Kuiper & Rogers（1979）は，特性語の示す性質が特定他者に当てはまるか否かを判断する他者参照課題を設け，自己参照条件と比較した。その結果，自己参照条件は，他者条件よりも再生成績が高かった。

このような自己参照効果の生起要因を説明するもののひとつに，感情価判断を用いて検討されてきた感情説があげられる（遠藤，1988）。感情価判断とは，刺激の持つ望ましい，好ましいなどの感情的に意味を持った情報（感情価：affective value）に関する判断のことであり，評価的判断とも呼ばれている。感情説では，自己参照過程にこの感情価判断が介在しており，刺激の感情価処理によって記憶が促進されるために自己参照効果が得られるとしている。

Ferguson, Rule, & Carlson (1983) は，好意度の異なる人物（好きな人，嫌いな人，好きでも嫌いでもない人，自己）について人格特性語が当てはまるかどうかを判断する群と，語の特性（意味，熟知度，イメージ喚起容易性，社会的望ましさ）について判断する群で記憶成績を比較した。その結果，自己参照条件が最も記憶成績が高かったが，語の感情価判断（社会的望ましさに関する判断）も同程度の記憶成績であった。このことから，自己参照効果はその課題に感情価判断が伴うために生じるものであるとし，感情説に支持を与えている。また，感情価判断のみによって自己参照効果を説明できると考え，その他の特別な説明は必要ないとしている。

一方，McCaul & Maki (1984) はFerguson et al. (1983) のような被験者間要因計画ではなく，被験者内要因計画によって実験を行うと，感情価判断条件よりも自己参照判断条件で記憶成績が優れるというデータを示しており，自己参照判断は感情価処理とは異なった処理を含んでいるとしている。

しかし，これらの報告はどちらも，自己参照過程に感情価処理と共通した処理が含まれているのかどうかについて十分な証拠を提示できてはいない。たとえ自己参照判断によって感情価判断よりも高い記憶成績が得られたとしても (McCaul & Maki, 1984)，自己参照過程に感情価処理と共通した処理が含まれている可能性は残る。一方，たとえ感情価判断によって自己参照と同程度の記憶成績が得られても (Ferguson et al., 1983)，自己参照過程には感情価処理と共通した処理が含まれていない可能性がある。一般的に，符号化課題に含まれ，記憶に影響を及ぼす処理次元は複数考えられる。したがって，自己参照条件において記憶量を増大させた下位過程と，感情価判断による記憶促進をもたらした下位過程とは異なるものである可能性がある。つまり，単純に記憶成績が同程度であっても同じ理由によって記憶が促進されているとは断定できないのである。したがって，自己参照過程に感情価処理が含まれているか否か検討するには，これまでのように課題ごとの記憶成績を比較するといった単純な手法では不十分である。

Nakao & Miyatani (2004) は課題促進パラダイム (Klein, Loftus, & Burton, 1989) を用いることにより，この問題を解決しようとした。課題促進パラダイムは１つの刺激に対して２つの課題（先行課題，標的課題）を行うように構成されており，以下のことが前提とされている。先行課題の処理プロセスによって，標的課題に関連した情報が処理され，その情報が標的課題の処理に適用可能となれば，標的課題に必要な処理時間は，情報が適用可能でない場合と比較して短くなる (Collins & Qullian, 1970; Macht & O'Brien, 1980; Machet & Spear, 1977)。

Nakao & Miyatani (2004) は先行課題と標的課題のそれぞれに自己参照課題，感情価課題，意味課題を用い，自己参照処理と感情価処理に共通した処理が含まれているかどうかを検討した。その結果，自己参照処理を行った直後の感情価処理が，意味処理を行った直後の感情価処理よりも反応時間が短くなった。このことから，自己参照処理を行うことによって感情価処理も行われていることが明らかとなった。しかしながらその逆の関係，すなわち，感情価処理を行った直後の自己参照処理が，意味処理を行った直後の自己参照処理よりも反応時間が短くなるといった結果は得られなかった。このことは，感情価処理を行うことによって自己参照処理が効率的になされるわけではないということを示しており，自己参照判断をする際には感情価判断で処理される情報が特に必要とされているわけではないということがいえる。これらの結果から，Nakao & Miyatani (2004) は，自己参照課題と感情価処理には共通した処理が含まれているのではなく，また，自己参照過程に感情価処理に関わる情報は必要とされていないが，自己参照を行うことによって感情価処理が誘発されると考えている。言い換えれば，ある特性が自分にあてはまるか否かを判断するのにはその特性が望ましいかどうかを考える必要はないが，自然にそうしてしまっている，ということである。

また，Nakao & Miyatani (2004) は，自己参照課題の代わりに知人を参照させる課題を用いて同様の検討を行ったが，自己参照の場合のような直後の感情価課題の反応時間を短くするという結果はみとめられなかった。このことから，彼らは感情価処理を引き起こすという性質は自己参照処理の特徴であると述べている。

しかしながら，彼らの用いた他者参照課題は知人という親密度の低い対象である。Keenan & Baillet (1980) は，親密度が高い対象について判断した記銘語ほど再認成績が良く，自己参照による再認成績に近づいていくことを示している。このことから，知人より親密な他者を参照した場合には自己参照の場合と同様，感情価処理を誘発するという性質を持っている可能性が考えられる。

そこで，本研究ではNakao & Miyatani (2004) と同様，課題促進パラダイムを用い，知人よりも親密である友人の参照過程の性質について検討する。もし，友人参照過程が感情価処理を誘発するのであれば，友人参照した直後の感情価処理に要する反応時間が，意味

処理した直後の感情価処理に要する反応時間よりも短くなると予測される。

方　法

被験者　正常な視力（矯正視力を含む）を持つ18歳から26歳の大学生および大学院生14名（男性２名，女性12名，平均年齢22.7歳）を被験者とした。

実験装置　刺激呈示と被験者の反応の記録に，パーソナル・コンピュータ (DELL社製 Dimension V433c)，15インチの液晶モニター，キーボードを使用した。

実験計画　先行課題３×標的課題３の２要因計画とした。

材料　青木（1971）を参考に72語の人格特性語を感情価が偏らないように選択した（付録参照）。表意文字である漢字の使用により，以下に示す意味課題の遂行に影響が生じるのを避けるため，特性語はひらがな表記とした。また，練習用として本試行用とは別の18語の人格特性語を準備した（付録参照）。

課題　先行課題，標的課題ともに，友人参照課題，感情価課題，意味課題の３種類を用いた。友人参照課題では，実験を始める前に友人を一人想定してもらい，人格特性後の示す性質がその特定の友人に当てはまるかどうかの判断を求めた（友人にあてはまりますか？）。感情価課題では人格特性語の示す性質が社会一般的に望ましいとされている性質であるかどうかの判断を求めた（一般的に望ましい性質ですか？）。意味課題では人格特性語の意味を定義するのが難しいかどうかの判断を求めた（定義するのが難しいですか？）。

手続き　Klein et al. (1989)，堀内（1999）を参考に行った。実験は72試行からなり，途中で２回の休憩を入れた。どの語をどの課題条件に割り当てるかは被験者ごとにランダム化した。９つの課題条件（先行課題３×標的課題３）の実施順序はランダムであった。

各試行では，まず先行課題の質問文を画面中央のやや上に呈示し，1 000 ms後，質問文の下に刺激語を呈示した。反応としてYesとNoにそれぞれ割り当てられたキー（Yes: 右キー，No: 左キー）のどちらかのボタンを押すことを求めた。判断後に先行課題の質問文は消え，1 000 ms後に刺激語の下に標的課題の質問文を呈示した。そこで再び判断を求めた。標的課題の呈示から反応までの時間を記録した。キーボードのシフトキーを押すことで次の試行に移った。

教示として，正確にかつすみやかに反応すること，先行課題と標的課題の質問文が同じ場合であってもあえて答えをかえる必要はないこと，次に呈示される質問文を予測して反応したり，何も考えずに反応したりしないこと，を強調した。本試行を行う前に18試行の練習を行った。

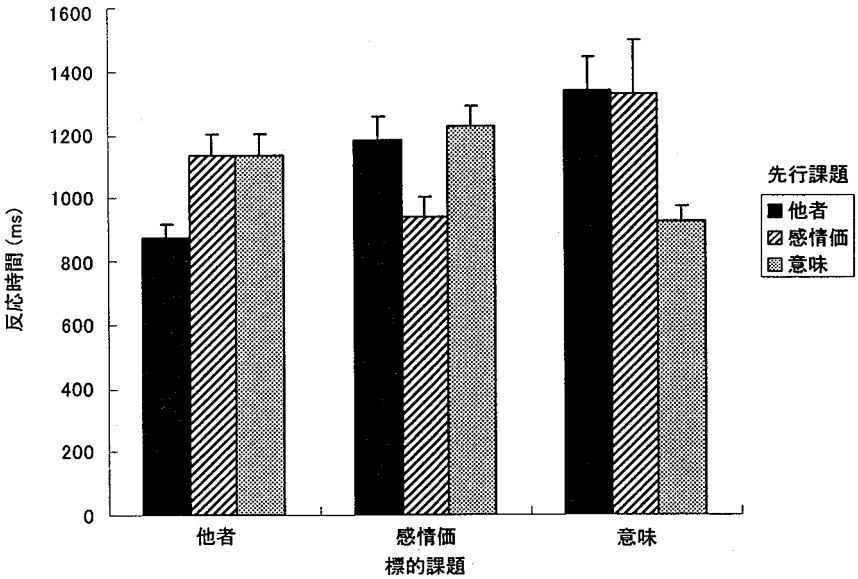

図１　標的課題と先行課題の組み合わせ別の標的課題に対する平均反応時間と標準誤差

結　果

外れ値の処理として，それぞれの被験者について条件ごとに平均値±2*SD*を算出し，その値をこえるデータを除外した。被験者ごとに標的課題に要した平均反応時間を求めた（図1）。先行課題の種類（3）×標的課題の種類（3）の2要因分散分析を行った。

その結果，標的課題の主効果（$F(2,26) = 3.81$, $p < .005$）と両要因の交互作用（$F(4,52) = 11.01$, $p < .0001$）が有意であった。標的課題の主効果についてRyan法による多重比較（5％水準）を行ったところ，友人参照課題に対する反応時間が意味判断課題に対する反応時間よりも短かった。交互作用について，どの標的課題条件でも先行課題条件の単純主効果が有意であったので，Ryan法による多重比較（5％水準）を行った。その結果,標的課題が先行課題と同じ課題であった場合にはそうでない場合よりも反応時間が短かった。しかし，友人参照課題後の感情価課題に対する反応時間が意味課題後の感情価課題に対する反応時間よりも短くなるといった，課題間で異なる結果は見られなかった。

考　察

本研究の目的は，知人よりも親密度の高い友人の参照過程が感情価処理を誘発するかどうかを検討することであった。課題促進パラダイムの基づく論理と一致して，標的課題が先行課題と同じ課題であった場合にはそうでない場合よりも反応時間が短かった。すなわち，先行課題の処理プロセスによって，標的課題に関連した情報が処理された場合には標的課題の処理時間が短くなっていた。しかし，標的課題における感情価課題の反応時間は，先行課題が友人参照課題である場合と意味課題である場合とで差がみとめられなかった。このことから，Nakao & Miyatani（2004）で検討したような単なる知人よりも親しい友人を参照した場合においても，自己参照のような感情価課題を促進する効果は見られないということが明らかとなった。

では，感情価処理を誘発するという自己参照過程の性質は，自己参照過程のみにあてはまる特性であり，他者参照過程にはあてはまらないのであろうか？もちろん本研究からは他者参照過程も感情価処理を誘発するとはいえないが，本研究で扱った友人よりもより親密な他者（母親など）を参照する場合にはそれが有意差として示される可能性が残っている。そのことを示唆するデータが図2である。図2はNakao & Miyatani（2004）と本実験の課題を親密さの程度によって並びかえ，自己や他者の参照課題によって感情価課題がどの程度促進されたかを示したもの（すなわち，それぞれの実験における意味課題の後の感情価課題の反応時間から，自己や他者の参照課題の後の感情価課題の反応時間を引いたもの）である。この図からわかるように，参照する対象が親密な他者であるほど自己参照に

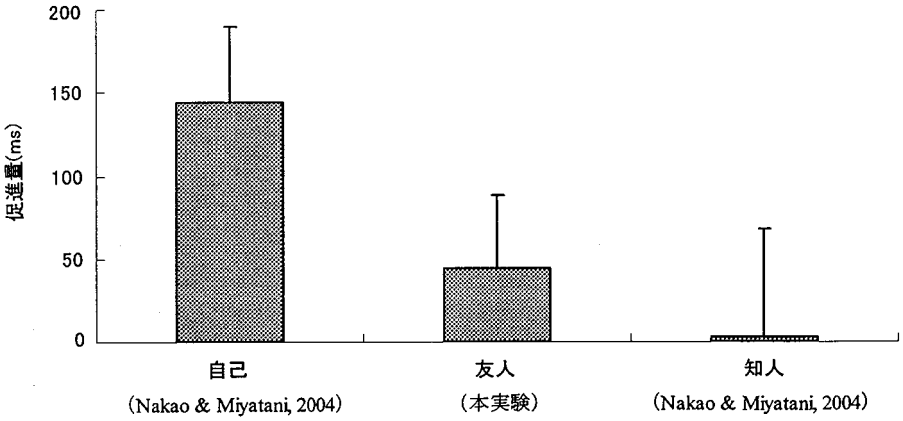

図2　自己・他者参照処理後の感情価課題の促進量とその標準誤差
促進量はそれぞれの実験における意味課題後の感情価課題の反応時間から，自己や他者の参照課題後の感情価課題の反応時間を引いたもの。

おけるパフォーマンスに近づいている。この関係はKeenan & Baillet (1980) の場合と同様であり，他者参照課題でも，かなり親密な人物を対象とすれば，後続する感情価判断に影響を及ぼす可能性が考えられる。

しかしここで注意しておきたいのは，親密な他者を参照するほど自己参照に伴うパフォーマンスに近づくからといって，自己参照過程と他者参照過程が量的な違いでしかないとはいえないということである。その可能性以外にも，自己参照過程と他者参照過程は質的に異なるが，より親密な他者になるほど自己を参照するような処理がなされるために自己参照過程と類似した性質を持つようになっているという場合も考えられるのである。課題促進パラダイムを用いれば，自己参照過程と親密な他者の参照過程の共通性をもたらす原因について調べることが可能であり，今後の検討課題のひとつである。

引用文献

青木孝悦 (1971). 性格表現用語の心理-辞典的研究－455語の選択，分類及び望ましさの評定－ 心理学研究, **42**, 1-13.

Collins, A.M., & Qullian, M.R. (1970). Facilitating retrieval from semantic memory: The effect of repeating part of an inference. *Acta Psychologia,* **33**, 304-314.

Craik, F.I., & Lockhart, R.S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,* **11**, 671-684.

Craik, F.I., & Tulving, E. (1975). Depth of processing and the retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: General,* **104**, 268-294.

遠藤由美 (1988). セルフと記憶－Self-reference効果を中心に－ 京都大学教育学部紀要, **34**, 187-199.

Ferguson, T.J., Rule, B.G., & Carlson, D. (1983). Memory for personally relevant information. *Journal of Personality and Social Psychology,* **44**, 251-261.

堀内 孝 (1995). 自己参照効果の解釈をめぐる問題 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, **42**, 157-170.

堀内 孝 (1999). 現実自己，理想自己，および，社会的自己における自己関連付け効果 心理学研究, **70**, 128-135.

池上知子 (1984). 社会的認知とセルフ－Self-Reference効果をめぐって－ 大阪音楽大学研究紀要, **23**, 96-114.

稲葉昌子・林 龍平 (1993). 自己準拠効果 (self-reference effect) に関する最近の研究 茨城大学教育学部紀要（教育科学）, **2**, 165-181.

加藤和生・丸野俊一 (1986). 自己照合効果研究の展望 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **31**, 107-129.

Keenan, J.M., & Baillet, S.D. (1980). Memory for personally and socially significant events. In R.S. Nickerson. (Ed.), *Attention and performance, VIII* (pp.651-669). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Klein, S.B., Loftus, J., & Burton, H.A. (1989). Two self-reference effects: The importance of distinguishing between self-descriptiveness judgments and autobiographical retrieval in self-referent encoding. *Journal of Personality and Social Psychology,* **56**, 853-865.

Kuiper, N.A., & Rogers, T.B. (1979). Encoding of personal information: Self-other differences. *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**, 499-514.

Macht, M.L., & O'Brien, E.J. (1980). Familiarity-based responding in item recognition: Evidence for the role of spreading activation. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory,* **6**, 301-318.

Machet, M.L., & Spear, N.E. (1977). Priming effects in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory,* **3**, 733-741.

McCaul, K.D., & Maki, R.H. (1984). Self-reference versus desirability ratings and memory for traits. *Journal of Personality and Social Psychology,* **47**, 953-955.

Nakao, T., & Miyatani, M. (2004). Asymmetric Relation between Self-referential Process and Evaluating Process. Manuscript submitted for publication.

Rogers, T.B., Kuiper, N.A., & Kirker, W.S. (1977). Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology,* **35**, 677-688.

Symons, C.S., & Johnson, B.T. (1997). The self-reference effect in memory: A meta-analysis. *Psychological Bulletin.* **121**, 371-394.

付録　刺激リスト

本試行用	
やかましい	おとなしい
おんこうな	どうじょうてきな
しつこい	ひかんてきな
おしゃべりな	しっとぶかい
えんまんな	がんこな
しゃこうてきな	しんけいしつな
なごやかな	ねっしんな
まじめな	そそっかしい
びんかんな	けんきょな
がまんづよい	わすれっぽい
じゅうじゅんな	せわずきな
いいかげんな	おちついた
しんせつな	のんびりした
あきっぽい	せいじつな
ひとのよい	かんだいな
きちょうめんな	うちきな
きまぐれな	ひかえめな
おくびょうな	りくつっぽい
きままな	ゆううつな
しんちょうな	げんきな
なさけぶかい	ひょうきんな
かつどうてきな	かんがえぶかい
ほがらかな	きらくな
でしゃばりな	げんかくな
ゆうかんな	むせきにんな
けいそつな	かんじょうてきな
かちきな	むきりょくな
れいせいな	おだやかな
みえっぱりな	むくちな
らっかんてきな	しょうじきな
ゆうべんな	そらぞらしい
やさしい	らんぼうな
ようきな	こどくな
せっかちな	いじわるな
おこりっぽい	きんべんな
れいたんな	ひとりよがりな

練習用
もうもくてきな
ふとっぱらな
うたがいぶかい
ぶあいそうな
ききじょうずな
しんぱいしょうの
なれなれしい
おおげさな
むとんちゃくな
ほらふきな
じゅんしんな
むこうみずな
れいぎただしい
せわしい
くよくよした
しょうきょくてきな
ひとなつっこい
ふあんていな